

今月の  
いいね!

## 深海の宝石アカムツ



アカムツ

【名前】

アカムツ

【すむ場所】

南日本。水深 60~600mの底層。

【大きさ】

全長 40cm

【当館で見られる場所】

駿河湾の生きもの

【特ちょう】

赤黒い体色と大きな目が特ちょうです。口の中が真っ黒なため「のどぐろ」とも呼ばれ、高級魚として知られています。

【担当学芸員から一言】

駿河湾で採集しました。市場で目にする機会はあると思いますが、なかなか生きた姿を目にすることはありません。この機会にぜひご覧ください。(Y.I)

### Q&A

## 疑問にお答えします：化石パート2

Q.すべての生き物は化石になるのですか？

化石は太古の昔に生き物が生きていた証拠です。化石はたくさんの偶然と、とてつもなく長い時間が積み重なり、その姿を残しています。また私たちの目の前に姿を現して初めて、化石として世の中に登場します。死んでしまった生き物が、化石になる前に食べられたり、分解されてしまっただけでは化石として残りませんし、土砂の中でバラバラになることもあります。

運よく、地層が切断されたり、偶然の土砂崩れなどで人に発見されなければ、化石として保管されることはありません。(S.T)



プロトケラトプスの化石標本

三保の浜辺で早朝散歩を日課としていると、“早起きは三文の得”をすることがあります。今年の年明けの1月19日に、体長16cmのサンゴ礁域に多いモンガラカワハギ科の仲間が打ち上がっているのを見つけました。手に取ってみると胸びれの下には見たこともない奇妙な出っ張りがありました(写真1)。これは新種かも知れないと思って、少しくさったにおいがしたものの体色はしっかり残っていたので、写真に収めてからホルマリン固定し、海洋科学博物館の登録標本(MSM-21-02)にしました。

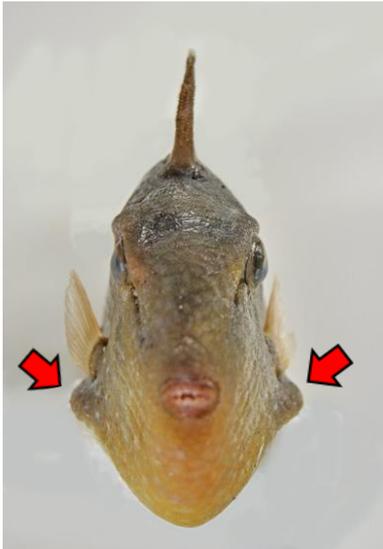


写真1 正面から見たアオスジモンガラ

どんなに図鑑を探しても同じ魚が見つからないので、モンガラカワハギ科ならこの人が一番と目星を付けて国立科学博物館の松浦啓一博士の名前でネット検索するとやはり出てきました。1981年にまさにこの出っ張りを特徴とするツバサモンガラをマリアナ諸島から新属(ツバサモンガラ属)新種として発表し、その後、2012年には2番目の標本を沖縄本島から報告しておられました。しかし、これらは体長6cmと4cmの稚魚なのでより大きな三保産の標本とは比較が困難でした。1983年に南アフリカから同じような出っ張りを持つ体長8cmの幼魚に基づいて、*Xenobalistes punctatus*という学名で同属の別種が報告されていました。体側に白っぽい斑点がたくさんある様子は本標本(写真2)に近い気がします。

種の確信が持てないままツバサモンガラの名前でネット検索すると、宮崎大学のウェブサイトには三保産の標本とよく似た個体の写真がアップされているのを見つけました。この個体は松浦博士により *X. punctatus* に同

定されていたため、私たちも博士に写真をお送りして伺ったところ、同種に違いないとのお返事でした。ただし、この種は成長に伴って胸びれ下の出っ張りや体の青白色点が消えてしまい、驚いたことに別属(ナメモンガラ属)のアオスジモンガラに変身するのだと教えていただきました。つまり、同じ種の幼魚と成魚が誤って別属別種に分類されていたわけです。この事は近く出版予定の西部インド洋の魚類図鑑で明らかにする、とのことでした。なお、博士によるとツバサモンガラについては体長20cm弱の標本が採集されていて、アオスジモンガラとは別種であることは分かっているものの、成魚の詳しい情報はまだないそうです。



写真2 アオスジモンガラ

アオスジモンガラは過去の記録と松浦博士からの情報をあわせると、南日本を含むインド・太平洋の水深50~200m付近に生息していますが、駿河湾では今回の標本が初記録になります。駿河湾産のモンガラカワハギ科魚類は他に13種の報告があり、アオスジモンガラと同じナメモンガラ属の種ではナメモンガラしか知られていませんでした。(元東海大学海洋研究所 助教授 岸本浩和・東海大学海洋学部博物館 学芸員 富山晋一)

※生物の状況により展示を急遽中止する場合があります。予めご了承ください。